普段着のわたしたち

８月８日のニュースです。思わずテレビ画面を激写いたしました。

岡崎市東公園動物園で、ヒトコブラクダが熱中症で死んだという内容です。

ペンギンやアザラシやシロクマが死んだのではありません。熱砂を何日も歩き続けるラクダが死んだのです！

いやはや、日本の夏も過酷さを増してきました。末恐ろしや。

訶梨帝母

お堂には長太鼓・平太鼓と、他のお寺には到底無いであろう「ボンゴ」があります。

元々設置してあったのですが、一昨年より盆施餓鬼の時にボンゴを叩き読経をしています。手ではなく太鼓のバチで叩きます。この南国風の音色が夏の「陀羅尼経」に妙に合います。出仕のK君が、お施餓鬼中に気まぐれで叩いていてみたのがきっかけです。僧侶も参詣者もなぜかニコニコになってしまいます。ボンゴの音に乗せられていつにも増してはつらつと大きな声で読んでしまいます。

楽しく読経するってどうなの…　と言われそうですが。

俊徳丸

先日、実家に寄った際に持ち帰った絵本です。このシリーズが本当に大好きで、母親にねだって買ってもらい、よく読み聞かせてもらったことを思い出します。箱もボロボロ、中身もボロボロですが、時を越えて息子に読み聞かせていると非常に感慨深いものがあります。

やっさん

皆さん観ておられますかな？　もちろん『鎌倉殿の１３人』です。

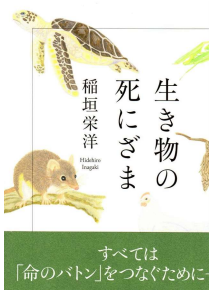
折り返し地点も過ぎまして、とっくに１３人じゃなくなっています。

今回は１３人の中の重要人物の比企能員を佐藤二朗さんが演じています。最高の演技で、コミカルながらもマクベスのようでもあります。

実は東郷町のご出身ということで、愛知県の方なんです。

征阿

はっきり言いますが、並みの佛教学者が書いた本より遥かに含蓄があります。それに読みやすい。稲垣氏は農学博士、専門は雑草生態学です。大抵の生物は人間より寿命が短い。限られた命を懸命に生きている姿に感動を覚えます。夏の終わり。毎日境内に蝉の死骸が転がっています。



迷走ボー

こもりうた92

晩夏にひとつ怪談を。「怪談和尚」なるご本人が発信しているので、ご存知の方も多いかと。

「埼玉県愛犬家連続殺人事件」を覚えてらっしゃいますか。1993（平成５）年に表面化。ペットショップ「アフリカケンネル」の経営者元夫婦（S&K）が顧客ら４人を毒殺（硝酸ストリキニーネ）。遺体損壊焼却。「遺体なき殺人」と呼ばれ世間を震撼させました。95 年 1 月、犯人らは逮捕されますが、同時期に阪神淡路大震災、オウム真理教サリン事件など続いた為か、当事件の凶悪さ残忍さの割にマスコミ報道が激減し、記憶の中に埋もれた事件かもしれません。2009 年６月、元夫婦は死刑確定。共犯者Yは懲役３年の実刑判決。2017年３月、夫 S は東京拘置所で死刑執行前に病死。この S、結婚離婚復縁を6度繰り返しKは７度目。天才ブリーダー？有能な経営者？ヤ〇ザ？人間心理を読むことに長け、話はすこぶる面白い人物だったそうです。

さて本題。「怪談和尚」の三木師。学生時代に埼玉の日蓮宗の寮で修行をしておられました。水行、作務、勉強、法要、書道。唯一の心の癒しが近くのペットショップの犬を眺めること。そこへ時々通ううちに社長と会い、「修行僧さんか、週１で犬の散歩のバイトしない？」と缶コーヒーを数本勧められつつ誘われました。１本のコーヒーを頂き、「寮監に許可をもらわないとできませんので」と帰宅。寮監に話すと「修行の身でバイトとはなんたる不心得者」と叱責を受け、後日社長の元へ断りに。すると「そうかそうか、気にするな」とまた缶コーヒーを数本勧められ１本頂き、「ところで神佛信じてるの？」と聞かれた際には「信じているからこうして修行続けていられるんです」と笑いながら答えて帰宅。2 年後、埼玉を出て次の寮へ移動になったため、犬と社長にお別れの挨拶へ。「そうかそうか、また会えたらいいな」と数本の缶コーヒーを勧められ１本頂き「では失礼します」と云うと、更に１本を差し出されました。その１本は「もうお腹いっぱいです」と固辞して辞去。

寮生活を終え京都に戻り数年後、TV で「あれ？あの社長だ」と思ったらそれが「愛犬家連続殺人事件」の犯人Sだったという顛末。

三木師の先輩僧の教誨師（受刑者に対し教誨、教戒を行う者）が S と面会。４人殺害（表面化していない犠牲者は多数あるとか）という大罪を犯したSが「神佛は在る」と信じているという。なぜなら、以前うちへ遊びに来た修行僧に毒入り缶コーヒーを勧めると、１本だけの毒なしを引き当てた。それも３回。最後に毒入りを１本手渡そうとしたら固辞して帰っていった。あれは神佛のご加護だ。自分は「運の悪い人間を殺してきたのだ」と。

のちにそれが三木師にも伝わり聞こえてきて、ぞっ…。

この事件は映画化もされています。

『冷たい熱帯魚』　ご参考までに。

訶梨帝母

虫のこえ

～音と声の差異～

暑い、暑い夏であった。

早朝から一日中耳に届く蝉の声は暑さを助長すると共に生命の躍動を感じさせ、外に出て日陰を探しては一息つき、その涼しさに感嘆の声を漏らす。住まいに戻れば一杯の水を口に含み、文明の利器に身を委ねて過ごす。とにかく暑かった夏は、兎にも角にも頭を下げ続けた夏であった。

その様な最中にあっても気付けば立秋を迎え、気温は下がらずとも夜には虫の鳴き声が聞こえてくるようになった。

「あれ松虫が鳴いている♪」とは唱歌『虫のこえ』であるが、この唱歌はなぜ『虫の音(おと)』ではなく『虫の声(こえ)』であったのだろうか。

これは自説である。

辞書によると、音とは「空気や水などの振動によって聴覚に引き起こされた感覚」とあり、声とは「人間や動物が発声器官を使って出す音」とある。ところが、虫には発声器官がない。『虫のこえ』に登場する虫でいえば、羽をこすり合わせることによって出る音である。

自然と共に生き、その恩恵に畏怖の念を抱きながら生きてきた私たちの祖先は、自然から発せられる数多くの音を言語、言葉として理解し、表現してきた。それは音を言葉で表現することによって、そこにある気持ちや心をも伝えようとしたからだ。

それが『虫のこえ』でも「チンチロリン」や「リインリン」と表現されている擬声語や、星がキラキラと輝く等の、キラキラと表現される擬態語と呼ばれるものになる。

音と声、両方とも音に違いはないが、音とはあくまでも耳で聞くものである。声には音を生き物に見立てて表したり、気配といった意味合いも含むものであるから、音を発したものに気持ちがあるとして、その気持ちを汲み取る、汲み取ろうとした時に音が声になる、ということが言えるだろう。

この気持ちを伝え合おうとする、心の遣り取りこそが声の正体である。私たちの祖先は音というものを私という存在と離れた別のものではなく、今、此処で私と共に生き、存在するものの声と解釈してきたのである。

身の回りにある音を、只の音として聞くならば、その音はその場限りの儚いものになるが、自らに語り掛ける声としてその音を聴くならば、時空を超えて生きた言葉となる。

私たちが信仰する佛さまの言葉(お経)が正にそれであり、目の前に鳴いている虫がいなくとも、唱歌『虫のこえ』を歌えば心の中は秋となり、虫の声がどこからともなく聞こえてくるような気持ちになるのがそれである。

相手が無いのが音で、相手が有るのが声。声とは、私という存在が語り掛ける言葉であり、私という存在に対しての語り掛けられる言葉である。

とどのつまり、唱歌『虫のこえ』にある声とは何かと問われれば、「ああおもしろい」ということになる。

やっさん

死と生を感じる季節

僧侶の体力が試される８月、ヨタヘロでお盆行事を乗り切りました。今年は熱中症とコロナウィルスBA・５が待ち構えていました。

30 年前、お位牌やお飾りが並ぶ盆棚の前でお経を称えますと、後ろから団扇で扇いでくださいました。その風の心地よかったこと。今年は、クーラーの風に替わっていました。

振り向くと、ご家族揃って T シャツに短パンという涼しげな服装。それに引き換え私の恰好は、（いつぞや俊徳丸さんが紹介されたように）ユニクロの AIRism の上に肌襦袢、白衣、衣、袈裟という暑苦しい民族衣装。「命の危険があるほどの暑さ」の中で他家を訪問するに相応しい服装でしょうか。

尋ねてみました、「来年は、お寺から檀家さんへ T シャツを配ってはどうでしょう。背中に『南無阿弥陀佛』のプリント入りで。みんなお揃いの T シャツを着て棚経を勤めては」。戸惑う方もいれば、

「いいんじゃない。伝統行事を守ろうと思ったら、少しづつ変えていかないと」いう声も。

コロナ禍も２年半に及んでいます。2020 年３月、タレントの志村けんさんが新型コロナに感染して急逝されました。遺体は病院から火葬場へ直行、遺骨だけが親族の元へ戻ってきました。最後の対面も収骨も叶わなかった志村さんのお兄さんが、「本当は盛大に送ってあげたかったのに」と悔しそうに話された姿に、日本中が衝撃を受けましたね。

佛教界は混乱しました。大寺院が参拝停止にしたり、葬儀のガイドラインを発表した宗派もあれば、何もしなかったところも。結局、各自で判断するしかなく、中には葬儀を断った僧侶もいたとか。クラスターの現場になることを避けて慎重になり、葬儀の規模は縮小し、家族葬が普通になりました。

冷静に考えますと、葬儀会館は焼香の煙を抜く換気装置がよく働いています。当山の本堂などはスカスカで自然換気が充分なのです。

６月頃にコロナ禍が鎮静化した時期には法事の打ち合わせが増えました。本当は葬儀に来てほしかった方もお呼びして、しっかり勤めようというご家族が増えたのです。

お釈迦さまは、「人生は苦である」と、生老病死の四苦をお説きになり、80 歳の生涯をとじられました。ウチの老僧に、「長生きの秘訣は何ですか」と尋ねてみました。「くよくよしないこと」と答えてくれました。101 歳で至って元気です。

桂枝雀さんは、代書屋さんに履歴書を書いてもらう松本留五郎さんに語らせています、

代「生年月日いうてもらえますか」
留「せぃぃねんがっっっぴ」
代「いえ、あんたの生まれた時のことです」
留「なんにもおぼえてないなぁ」

「**死を明らめ、生を明らめるは、出家の一大事なり**」だそうです。　　迷走ボー

盂蘭盆の迎え方

私の住んでいる地域では、8月13日のお昼前頃から夕方にかけて（出来るだけ早い時間が良いとされている）、写真の瓜模様の盆提灯を持参して墓参りをする。墓参後、提灯の蝋燭を灯すと、ご先祖さまの精霊が墓碑から出て来てこの提灯に入られる。そのまま大切に家まで持ち帰り、お佛壇の前で灯を消すと、ご先祖さまは無事「里帰り」をされたのだと子供の頃教えられた。私のように帰り道に振り回して提灯が燃えてしまうとひどく叱られる。15日の送りには逆の事をして墓碑の前で灯を消す。この盆提灯は七月盆の頃からスーパーなどで売られている。安価で 120 円前後だ。初盆を迎えられる方には真っ白な提灯が売られている。お隣、愛知県ではこの提灯は一切使われていない。何年か前に16日に岐阜羽島駅から新幹線に乗車して、車窓からその使用地域を調べたことがある。墓地にこの提灯があるのは、大垣を過ぎて関ケ原手前までであった。ごく限られた習慣だといえます。

京都東山（清水寺の坂を下りた所）に「六道珍皇寺（ろくどうちんのうじ）」という禅宗のお寺がある。「ろくどうさん」と呼ばれ、地元の人々に親しまれているお寺で観光寺院ではない。8月7日から10日までの朝6時から22時まで「六道参り」が行われ、多くの参詣者がたえない。このお寺の本堂奥には、並んで 2 つの井戸がある。一つは、「この世からあの世へ通じている井戸」。もう一つは、「あの世からこの世へ通じている井戸」がある。お盆に里帰りされるご先祖さまは、この井戸から出ていらっしゃるのだ。だから家の宗旨がなんであろうと関係なく、地元の人々は

このお寺へご先祖さまをお迎に行くので、早朝から夜まで連日賑わうのです。お寺の前の道は車両通行止めになり、多くの露店商が出ています。その中に「高野槙」の枝が2本 1,500 円程で売られている。高野槙は、関西では佛事のお花として日常的によく使われるとても良い香りがする。井戸から出てこられたご先祖さまは、高野槙の上に乗られてお家まで運ばれるのです。来寺して先ず高野槙を購入します。そして次に長い行列に並びます。「迎えの鐘」です。里帰り途中、ご先祖さまが「六道の辻」で道に迷わないように鐘をついてお導きをいたします。梵鐘は朱色のお堂内に設置され、緑色の窓の下から太い綱が出ており、それを手前に引っ張ると音が出る仕組みになっています。他には無い梵鐘です。混雑しているので炎天下40分程並ばないといけない。あるおばあちゃんは、「猛暑やから、もう高齢だし、今年こそは止めとこと思い家を出るのやけど、行くとついつい並んでしまう…」、その気持ちわかります。露店で、ご先祖さまが好物だった柴漬けでも買って帰ります。

ちなみに、8月16日にご先祖さまを送る寺は別にあります。寺町三条の「矢田寺（やたでら）」です。ここには、「送りの鐘」があります。

俊徳丸

『私説法然伝』（９１）

助けてほしい⑥

先月号では法然上人の弟子になる武者・熊谷次郎直実について書きました。今月号はその続きについて書きます。

【熊谷次郎直実は京の都へ来た。伝記本によればそこで聖覚法印（せいかくほういん）（信西入道の孫）を訪ねたという。法然上人の教えを信じていた聖覚法印であったので、熊谷次郎直実に法然上人のところへ行くよう勧めたという。そこでどのような問答があったのかは不明だが、すでに法然上人の事は知っていたはずである。そうでなければわざわざ京の都へ来る必要もない。伊豆で出会った念佛僧（尼僧と伝えられている）から情報は得ていたはずである。なので取次のような形でまずは聖覚法印に面会したのではないだろうか？そして満を持して法然上人との面会となったのではないだろうか？おそらく建久年間において法然上人はすでにそれなりの数の信徒を抱える教団を築きつつあったのではないだろうか？無論、南都北嶺または門跡寺院のような所領を持つほどの勢力には足元にも及ばないであろうが、教団として着実に成長していた事は九条兼実ほどの実力者も信徒となっていることから推察出来る。九条兼実、善慧房證空、熊谷次郎直実、という三者が法然上人と関係を結ぶ、それらは関係が無いように見えるが、今の時代から見つめ直すとまた見えてくるものがある。その一つが九条兼実が法然上人との関係が深くなるということは、同時に経済的にも関係が深くなるということである。つまり最大の「檀家」とも言えるのである。それによって法然上人の「教団」が維持され弟子を増やすことが出来るようになる。そうなると善慧房證空のように最初から法然上人のもとで学びたいという者が現れてくる。法然上人のもとで学んだ者が増えれば、それを各地に伝える者も増える。それによって熊谷次郎直実のように坂東武者も法然上人を訪ねて弟子となることが可能になったのである。こうして法然上人の支持者は増えていったのである。

以下次号に続く（征阿）

だが、それは喜ばしい事ばかりでもなく、やがて法然上人の人生に深く影響する出来事の始まりでもあった。

熊谷次郎直実が法然上人の吉水の坊舎を訪ね、面会する日がやってきた。法然上人を待っている間、熊谷次郎直実は短刀を取り出し、研ぎ始めたという。】